

【研究報告】

特別支援学校の修学旅行の実態と オホーツク地域の受け入れ可能性

中岡 良司* 武田富美子*

【要 旨】

特別支援学校の修学旅行に関して全国で初めて実態調査を実施した。その結果、参加生徒数10人未満の旅行規模が多いこと、引率教職員数が多いこと、体験学習を重視していること等が明らかになった。北海道は受け入れに有利な条件が揃っているが、障害を持つ生徒の旅行を積極的に受け入れるためには医療機関の充実と広報活動が必要である。

【キーワード】 特別支援学校、修学旅行、全国調査

I. はじめに

現在、わが国には1,026校の特別支援学校（旧養護学校）があり、小学校から高校まで約11万2千人の児童・生徒が学んでいる（平成20年度調べ）。

学校生活において、修学旅行は最も楽しい思い出として長く記憶に留まるであろう貴重な体験の一つであるが、障がいを持つ彼らにとってその実現は容易ではない。交通機関の確保や宿泊先の確保ばかりでなく、多くの旅行地はバリアフリーへの対応や視覚障がい者や聴覚障がい者への配慮が不足している。しかしながら、これまでその旅行実態は関係者以外に知られていない。

一方、北海道をはじめ多くの地域は観光を産業として位置付け地域活性化を図ろうとしている。障害を持つ児童・生徒の修学旅行の受け入れ体制を整えることは、地域のバリアフリー化を推し進め、一般の障がい者や高齢者の観光需要にも結びつく大きな可能性を秘めている。

以上のような背景の下で、本研究ではまず特別支援学校の修学旅行の実態を明らかにすることを目的とした。この目的での全国調査はわが国で初めてであり、全国特別支援学校校長会の全面的な支援を得て実施することができた。本研究の第2の目的は、調査結果に基づき北海道東部のオホーツク地域にお

いて具体的な旅行プランを設計し、特別支援学校の修学旅行を実際に誘致することである。この企画は現在進行中である。

本稿では、本研究の基礎資料となる実態調査の概要と主要な結果について報告する。また、調査は小学部、中学部、高等部について実施しているが、ここでは最も行動範囲が広い高等部の調査結果に限って報告する。

II. 調査概要

調査の概要は以下の通りである。

- 1) 調査対象：全国の特別支援学校1,026校
- 2) 調査方法：郵送配付、郵送回収
- 3) 調査時期：平成22年1月～2月
- 4) 調査内容：共通シート、小学部調査票、中学部調査票、高等部調査票の全8ページの調査票
- 5) 回収状況

高等部の回答学校数は576校であった。高等部は全調査対象校に設置されているので回収率は56.1%である。表1に、その障害別内訳を示す。複数の障害を受け入れている学校は複数回答となっているので合計は回答学校数と一致しない。

平成20年における視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病弱の生徒が通う学校の全国構

* 日本赤十字北海道看護大学

成比は、それぞれ 6.9%、9.5%、50.5%、23.0%、10.1%であった。調査結果はほぼ同様の比率であることから、偏ることなく全国的な調査が実施されたことがわかる。

表 1 回答学校の障害種別

回 答	内 訳	回答数	%
回答学校の障害種別 (複数回答)	視覚障害	60	7.6%
	聴覚障害	59	7.5%
	知的障害	400	50.6%
	肢体不自由	191	24.1%
	病弱	81	10.2%
	計	791	

Ⅲ. 調査結果

1. 修学旅行の実施内容 (表 2)

1) 実施学年

修学旅行の実施は 3 年生の時が最も多く全体の 60%を占めている。2 年生での実施も 34%と多い。なお、対象人数が少ない学校の場合は 2 年生、3 年生合同で隔年実施という事例も見られた。

2) 旅行時期

単月では 5 月が最も多く、6 月を加えると春から初夏の実施が全体の 31%である。しかし、それ以上に多いのは 9 月と 10 月を合わせた秋の実施であり全体の約 4 割を占めている。

3) 宿泊日数

2 泊 3 日が 60%で最も多く、次いで 3 泊 4 日が 34%であった。4 泊以上の 14 校の内、5 校が北海道、4 校が沖縄の学校であった。

4) 旅行人数

特別支援学校の旅行人数が少ないことは、事前のヒアリング調査から分かっていた。調査結果を見ると参加生徒数 10 人未満が最も多く全体の 35%を占めている。また、全体の 66%が 20 人未満の参加者数である。

10 人未満の参加人数に関してはさらに 1 人単位での集計も行った。単数では 5 人が 16.7%と最も多く、5 人以下で 10 人未満全体の 56.9%を占めている。

5) 生徒数と教職員数

参加生徒数に対する引率教職員数が多いのも特別支援学校の修学旅行の特徴の一つである。

表 2 修学旅行の実施内容

実施内容	内 訳	回答数	%
実施学年	1 年	30	4.4%
	2 年	233	34.0%
	3 年	412	60.1%
	その他	11	1.6%
	計	686	
旅行時期	1 月	11	2.0%
	2 月	7	1.2%
	3 月	9	1.6%
	4 月	29	5.2%
	5 月	119	21.2%
	6 月	56	10.0%
	7 月	35	6.2%
	8 月	3	0.5%
	9 月	108	19.3%
	10 月	109	19.4%
	11 月	41	7.3%
	12 月	34	6.1%
	計	561	
宿泊日数	0 泊	3	0.5%
	1 泊	18	3.2%
	2 泊	334	59.9%
	3 泊	189	33.9%
	4 泊～	14	2.5%
計	558		
旅行人数 (全体)	1 - 9 人	192	34.7%
	10 ~ 19 人	172	31.1%
	20 ~ 29 人	89	16.1%
	30 ~ 39 人	55	9.9%
	40 ~ 49 人	24	4.3%
	50 人～	21	3.8%
計	553		
旅行人数 (10 人未満)	1 人	13	6.8%
	2 人	14	7.3%
	3 人	23	12.0%
	4 人	27	14.1%
	5 人	32	16.7%
	6 人	19	9.9%
	7 人	25	13.0%
	8 人	19	9.9%
	9 人	20	10.4%
計	192		
生徒 1 人の旅行費用	1 万円未満	3	0.6%
	1 万円～	5	0.9%
	2 万円～	1	0.2%
	3 万円～	6	1.1%
	4 万円～	22	4.1%
	5 万円～	38	7.0%
	6 万円～	70	12.9%
	7 万円～	98	18.0%
	8 万円～	146	26.9%
	9 万円～	62	11.4%
	10 万円～	47	8.7%
	11 万円～	27	5.0%
	12 万円～	12	2.2%
13 万円以上	6	1.1%	
計	543		

図1に生徒数と教職員数の関係を示した。決定係数 R^2 乗値が0.69と、両者は強い相関関係にある。

回帰式は $y = 0.35x + 4.24$ となり、傾向としてのどの学校も平均的に約4人の教職員が引率に付き、児童数が3人増えると教職員が1人増える関係にある。

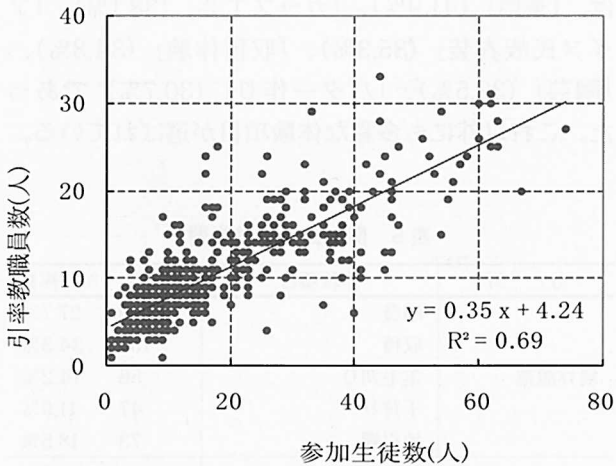


図1 参加生徒数と引率教職員数

6) 旅行費用

生徒1人当たりの旅行費用は8～9万円が最も多かった。平均は79,401円（最低額は5,000円、最高額は137,000円、標準偏差は20,846円）である。

7) 旅行先

図2は、旅行先を都道府県単位で集計したものである。最も多かったのは千葉県であった。千葉県には「東京ディズニーランド」がある。複数回答であるため、第2位は東京都となっている。エリアで考えると、第1位は東京エリア、第2位は沖縄エリア、第3位は大阪・京都エリア、第4位が北海道エリアである。

表3は、修学旅行の全国流動を知るために、全国を11ブロックに分けて、出発地と旅行先の関係を示したものである。なお、データ数が少ないため数値は実数（学校数）で示している。圧倒的多数が関東に集中しているが、東北からは関東よりも近畿へ行く割合が高い。また、北海道を選ぶ割合の高い地方は関東、北陸、東海、近畿となっているが、とりわけ北陸は約4校に1校が北海道に来ているという結果となっている。

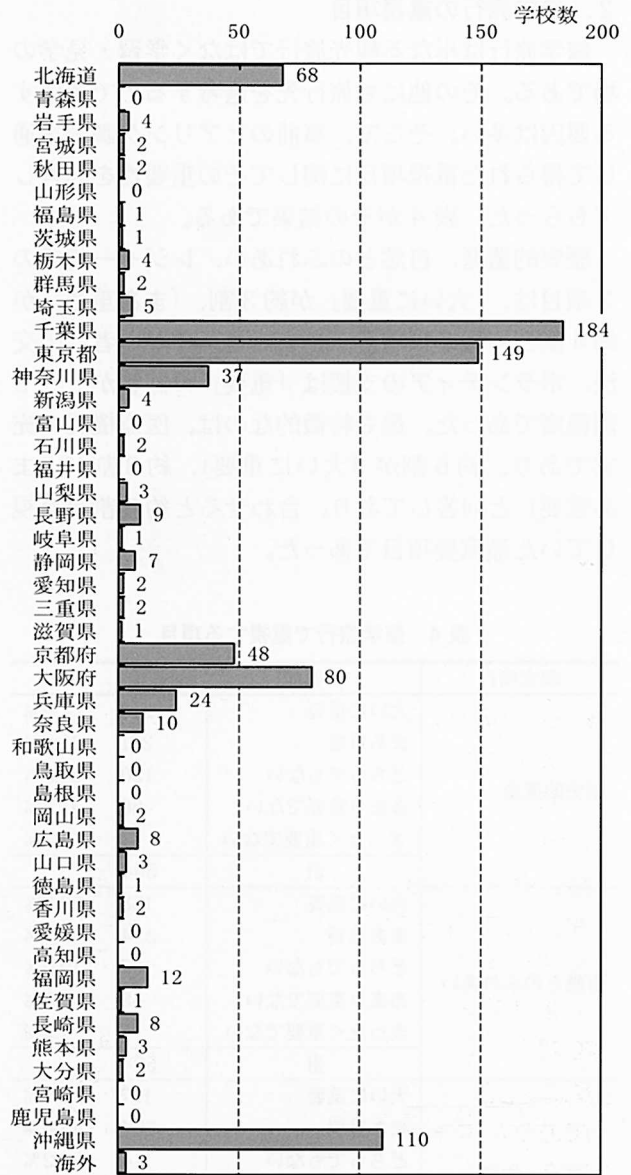


図2 旅行先都道府県（複数回答）

表3 修学旅行の発着ブロック（学校数）

発	北海道	東北	関東	甲信越	北陸	東海	近畿	中国	四国	九州	沖縄
北海道	3	0	31	1	0	2	8	1	0	0	1
東北	7	0	32	0	0	0	75	1	0	0	13
関東	20	9	21	4	0	2	24	0	1	2	43
甲信越	3	0	31	0	0	0	8	2	0	1	13
北陸	12	0	29	0	0	0	4	0	0	6	1
東海	7	0	12	1	2	1	7	4	1	9	11
近畿	13	0	33	4	0	6	9	4	1	6	18
中国	2	0	54	0	0	0	14	1	0	0	2
四国	1	0	42	1	0	0	3	0	0	0	6
九州	0	0	82	0	0	1	9	0	0	2	2
沖縄	0	0	15	5	0	0	2	0	0	0	0

2. 修学旅行の重視項目

修学旅行は単なる観光旅行ではなく学習・見学の場である。その他にも旅行先を選考する上で考慮する要因は多い。そこで、事前のヒアリング調査を通じて得られた重視項目に関してその重要性を回答してもらった。表4がその結果である。

歴史的遺産、自然とのふれあい、レジャー施設の3項目は、「大いに重要」が約3割、「まあ重要」が約4割と同様の傾向を示していた。障がい者との交流、ボランティアの支援は「重要」の回答が2～3割程度であった。最も特徴的なのは、医療機関の充実であり、約6割が「大いに重要」、約3割が「まあ重要」と回答しており、合わせると約9割が重視していた最重要項目であった。

表4 修学旅行で重視する項目

調査項目	重要度	回答数	%
歴史的遺産	大いに重要	140	24.8%
	まあ重要	231	41.0%
	どちらでもない	120	21.3%
	あまり重要でない	66	11.7%
	まったく重要でない	7	1.2%
	計	564	
自然とのふれあい	大いに重要	168	29.8%
	まあ重要	234	41.5%
	どちらでもない	107	19.0%
	あまり重要でない	48	8.5%
	まったく重要でない	7	1.2%
	計	564	
レジャー施設	大いに重要	137	24.3%
	まあ重要	254	45.0%
	どちらでもない	114	20.2%
	あまり重要でない	53	9.4%
	まったく重要でない	6	1.1%
	計	564	
障害者との交流	大いに重要	28	5.0%
	まあ重要	91	16.2%
	どちらでもない	298	52.9%
	あまり重要でない	116	20.6%
	まったく重要でない	30	5.3%
	計	563	
現地ボランティア団体の支援	大いに重要	57	10.1%
	まあ重要	139	24.7%
	どちらでもない	235	41.8%
	あまり重要でない	95	16.9%
	まったく重要でない	36	6.4%
	計	562	
医療機関の充実	大いに重要	353	63.0%
	まあ重要	150	26.8%
	どちらでもない	34	6.1%
	あまり重要でない	23	4.1%
	まったく重要でない	0	0.0%
	計	560	

3. 希望する体験学習

一般校においても、今日の修学旅行は体験学習が主流である。とりわけ、特別支援学校の修学旅行の場合は、体験学習が重視される傾向にある。

表5は、あらかじめ体験項目を提示して、関心のある体験学習項目を選択してもらった（複数回答）結果である。最も関心の高かったのは「自然観察」（48.0%）であった。30%を越える人気の体験項目は、「乗馬」（41.9%）、「ガラス工芸」（38.1%）、「アイヌ民族衣装」（35.3%）、「収穫体験」（34.3%）、「陶芸」（32.5%）、「バター作り」（30.7%）であった。これ以外にも多彩な体験項目が選ばれている。

表5 関心ある体験学習

分野	体験項目	回答数	% (複数)
農林漁業	酪農	109	27.7%
	収穫	135	34.3%
	羊毛刈り	56	14.2%
	干狩り	47	11.9%
	地引網	73	18.5%
食品加工	バター	121	30.7%
	チーズ	107	27.2%
	ソーセージ	114	28.9%
	ジャム	68	17.3%
	パン	82	20.8%
	そば	69	17.5%
	うどん	78	19.8%
	ピザ	54	13.7%
	豆腐	54	13.7%
味噌	30	7.6%	
創作・文化	リース	60	15.2%
	木工	73	18.5%
	陶芸	128	32.5%
	ガラス工芸	150	38.1%
ネイチャー	自然観察	189	48.0%
	バードウォッチング	28	7.1%
	登山	65	16.5%
ウォーター	カヌー	90	22.8%
	ラフティング	70	17.8%
	釣り	79	20.1%
フィールド	乗馬	165	41.9%
	キャンプ	57	14.5%
	トレッキング	56	14.2%
	山菜採り	31	7.9%
冬の遊び	スキー	103	26.1%
	スケート	40	10.2%
	カーリング	52	13.2%
	雪像作り	60	15.2%
	雪合戦	60	15.2%
アイヌ文化	民族衣装	139	35.3%
	アイヌ語	37	9.4%
	住居復元	29	7.4%
回答校数		394	

4. 北海道への旅行可能性

旅行先として北海道およびオホーツク地域を選ぶ可能性を聞いてみた。表6にその結果を示す。

北海道を選ぶ可能性が「大いにある」という回答は16%に過ぎないが、実数では90校に及んでいる。「少しある」の約9%を合わせると約25%の学校に可能性が見られた。

次に、オホーツク地域を選ぶ可能性に関してはどうであろう。「大いにある」と答えた学校は4校(約1%)のみであった。「少しある」の20校(約4%)を加えても少数に過ぎないが、知名度の低いオホーツク地域に魅力を感じている学校が実数で24校いることを重視すべきだろう。

表6 旅行先として選ぶ可能性

旅行先	旅行可能性	回答数	%
北海道	大いにある	90	16.0%
	少しある	50	8.9%
	どちらとも言えない	148	26.3%
	ほとんどない	146	26.0%
	まったくない	128	22.8%
	計	562	
オホーツク	大いにある	4	0.7%
	少しある	20	3.6%
	どちらとも言えない	165	29.4%
	ほとんどない	211	37.5%
	まったくない	162	28.8%
	計	562	

IV. 考 察

調査の結果、これまでほとんど知られてこなかった特別支援学校の修学旅行のいくつかの特徴が明らかとなってきた。多くの学校は、主に3年生の秋に、10人以下と少人数で、旅行費用約8万円で2泊3日の修学旅行に出かけている。旅行先の1番人気は東京ディズニーランドを中心とした東京エリアであり、次いで沖縄エリア、大阪・京都エリア、北海道エリアである。観ることよりも自然とのふれあいなど体験学習を重視する傾向にあり、障がいを持つ生徒であるため医療機関の整備状況には極めて関心が高い。

以下、3点に関して総合的な考察を加える。

第1に特別支援学校修学旅行における旅行人数に関してである。多くが参加生徒数10人未満と小規模で、引率する教職員数が極めて多い。障害の種別や程度によっては生徒と同数の教職員が付いている

場合もある。これは、新たに修学旅行を受け入れようとする地域にとって大変有利な条件と言える。少人数であるから移動手段や宿泊先の確保が容易である。また、十分な教職員が引率しているため、受け入れ先で特別な人手が必要になることもない。したがって、障がい者と日常的に接している福祉系NP〇法人等にとっては、比較的日常的な活動の延長の中で修学旅行の生徒を受け入れることができる可能性が高い。

第2に特別支援学校修学旅行における医療機関の整備の重要性である。実態調査の極めて特徴的な結果として、全体の9割以上の学校が修学旅行先として選択するには医療機関の充実が重要であると答えている。身体的に弱者である彼らにとって、万が一の時に対応してくれる医療機関が無ければ安心して旅行を楽しむことができない。より具体的には、ヒアリング調査結果では緊急時には救急車が30分以内に到着することを望む声が多かった。これは特別支援学校の旅行に限らず、将来的に一般の障がい者あるいは高齢者が旅行する場合においても医療機関の充実は重要課題である。これまで観光と医療はともに議論されることは少なかったが、これからの観光振興のためには医療機関の整備が不可欠である。

第3に特別支援学校修学旅行において北海道を選択する可能性についてである。全国の約90校(16%)の学校が北海道を選ぶ可能性が「大いにある」と回答している。さらに「少しある」を加えると、最大約25%の学校が北海道に来る可能性がある。さらにオホーツク地方を選ぶ可能性は、現状では「大いにある」は4校(0.7%)に過ぎないが、「少しある」を加えると最大約4%ほどの可能性がある。

人口の多い関東圏、関西圏から見れば、北海道は距離的には沖縄と競合している。沖縄には優れた歴史や文化があり、北海道には豊かな自然と食べ物がある。ヒアリング調査においても沖縄か北海道かで迷う学校が多いことがわかった。旅行日数に関しては、2泊3日の場合は航空機を利用しても遠隔地への旅行は日程的に厳しいものがあるが、3泊4日の場合は北海道への誘致の可能性が生じる。旅行費用に関しては、教育委員会が定めた基準額があるため、遠隔地へ出かけたくても航空運賃の高さが障害となっている。北海道への誘致を促すためには何らかの割引制度が必要となる。

北海道とりわけオホーツク地域で実施可能な体験

学習項目は極めて豊富である。とりわけ自然体験、食品加工体験の種類は多い。時期が許せば冬の遊びも体験可能である。この体験学習の豊富さはどの観光エリアにも劣ることはない。体験学習を重視する特別支援学校の修学旅行の受け入れの可能性は大きいと言える。そのためには、特別な受け入れ体制の整備も必要である。例えば、特別支援学校の生徒の場合、どのような体験現場においてもトイレの設置が必要である。

全国的な視点からは、北海道とりわけオホーツク地域の知名度はほとんど無いのが現状である。今後、特別支援学校の修学旅行先となるためには、受け入れ体制の整備とともに積極的な広報活動も必要である。

V. おわりに

本研究に関しては、冒頭に記したように、調査の一次集計が終わった直後から地元NPOを中心とするオホーツク地域への特別支援学校の修学旅行の受け入れに関するプロジェクトが進行している。既に、国土交通省の支援を受けて、専用の旅行パンフレットが作成され平成23年中にも旅行の受け入れが実現の見通しである。

とはいえ、著者らは必ずしもオホーツク地域だけの受け入れ体制の整備を望んでいるわけではない。特別支援学校の旅行単位が少人数であるという特徴を生かして、全国各地で受け入れ体制の充実が図られ、将来的には障がい者も高齢者も充実した支援の下で、誰もが快適な旅行を楽しめる状況が来ることを望んでいる。

謝 辞

本研究は、平成20年度日本赤十字北海道看護大学共同研究費の助成を受けて実施いたしました。同大学に深く感謝いたします。また、全国調査に際しては全国特別支援学校校長会からさまざまなアドバイスをいただくとともに全国特別支援学校の宛名ラベルをご提供いただきました。事前のヒアリング調査にご協力いただきました特別支援学校長、そして調査にご回答いただきました修学旅行担当者各位に厚く御礼申し上げます。

VI. 参考文献

- 1) 全国特別支援学校校長会ほか：全国特別支援学校実態調査、2008.
- 2) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：特別支援教育資料（平成20年度）、2009.
- 3) 財団法人全国修学旅行研究協会：修学旅行ドットコム、<http://shugakuryoko.com/index.html>